総合文化研究所主催講演会
「インドネシアにおけるイスラー・ミウラージュ物語」
2013年5月20日
ディック・ファン・デル・メイ（シャリフ・ヒダヤトゥラ国立イスラム大学宗教・文化研 究センター顧問）

「もっと海を！ Mehr Meer ヨーロッパで多言語世界の文学を考える」
2013年11月8日
イルマ・ラクーザ（作家・翻訳家）、多和田葉子（作家）、山口裕之、前田和泉

「ピーター・フランクル特別講演会　僕が11カ国語を話す理由!!」
2014年1月31日
ピーター・フランクル（数学博士・大道芸人）

総合文化研究所共催講演会
「アントニオ・ロペスのリアリズム　～永続する瞬間～」
2013年5月17日
木下亮（昭和女子大学教授）

「この気持ち　いったい何語だったらつうじるの？　～表象文化とグローバリゼーション　漫画家・小林エリカ特別講義～」
2013年5月30日
小林エリカ（作家・漫画家）

「文芸フェス！　～村上春樹は来ないけど（笑）～」
2013年7月5日
沼野恭子

「20世紀の日西美術交流――アンフォルメルを中心に」
2013年12月3日
松田健児（慶應義塾大学）

「文学翻訳の難しさ」
2013年12月5日
コリーヌ・アトラン（日本文学研究者・作家）

「ガウディだけじゃない！　スペインの近現代建築――合理性と表現性のはざま」
2013年12月10日
伊藤喜彦（東京理科大学）

「東南アジア文学の魅力と翻訳――インドネシアベストセラー小説『虹の少年たち』の訳者にきく」
2013年12月16日
福武慎太郎（上智大学外国語学部アジア文化研究所准教授）
加藤ひろあき（東京外国語大学外国語学部卒業生）

「アンデスに生きる西洋中世：キリスト教教会と先住民芸術における「人魚」の表現をめぐって」
2014年3月3日
マルガリータ・ピラ・ダ・ピラ（ボリビア、サン・アンドレス・デ・ラパス大学）

総合文化研究所上映会
『マルメロの陽光』（ビクトル・エリセ監督）
2013年6月18日
松浦寿夫

編集後記

「感覚の組織化」――この古典的であると同時に、いまだ開かれた認識論をめぐる問題系に、さて同僚所員はどんなふうに取り組むのだろうか、と少なからずはらはらしつつ、各氏の玉稿が出揃うのをながめていた。

結果は案ずるより産むが易し。

「半自然主義者」漱石のありようを、例によって穿つがごとく浮き彫りにした柴田論文、記憶の生成とアイデンティティをめぐる両義性をはらんだ小説テクストを、ブラジル社会の実相まで視野におさめつつ、「開かれた作品」として読み直した武田論文、十三世紀中葉、神秘家ルーミーの遺した詩作に「共感覚」的表現域を、詩的テクスト（とりわけ比喩）生成の「参加」の様態として析出した藤井論文――いずれも力作であることは言うまでもないが、編者のようにヨーロッパの文学・芸術を主たる研究対象として足掻いている者には、このどれもがみずからの研究と呼応し、あるいはそれに援用可能であると確信するものであった。

こうした、いわばヨーロッパ研究者の予感の行き着く先をしめしてくれるのが、山口所員による多和田葉子とイルマ・ラクーザの対談・朗読についての報告であるだろう。

昨秋、本研究所にて開かれた催しは、言語を起点に差異と結合と越境、あるいは侵犯を繰り返すことで手渡される自己表出の沃野において、果敢に表現の冒険をつづけるふたりを迎えて、聴衆も巻きこんだみごとな「感覚の組織化」の実践の夕べであった。

さて小誌次号にむけて、あらたに山口裕之氏を所長に迎える本研究所が、いっそう充実した活動を展開することを祈りつつ、編集子としてのささやかな仕事を終えることにする。

（和田忠彦）